



青い春の綻び



空がどんよりと重たく曇っていることに気付いたのは、短い眠りから覚めたときだった。

どうやら昼飯に対する食欲よりも、眠気の方が勝っていたらしい。その証拠に、今し方まで突っ伏して眠っていた卓袱台に冷えきったコンビニ弁当が袋に入ったまま放置されている。こんなことならレンジで温めてもらおうじゃなかったと、寝ぼけの抜けない頭で思う。

「...て、雨！」

風のないベランダには、湿気を存分に吸い込んだ洗濯物たちがこれ見よがしに吊られていた。確か昨日の夜に干したままだったはずだ。天気予報すら見る暇もなくバイトへ向かった今日の朝に、のんびり洗濯物を取り込む時間などあるわけもなく、こうして今もお冷たい外気に晒されているわけだ。面倒臭さをとっぴらって、ベランダへ向かう。開いた窓から吹き込んでくる風は鋭利で、冬將軍はやはり乾燥に参っているんじゃないかと、そんなことが脳裏に浮かんだ。

大学生になってから始めた一人暮らしは、すぐに俺の手には負えなくなった。家賃、光熱費、食費、あと携帯料金。その他諸々。元々物欲の少なかった俺は、生活するにはこんなに金がかかるものかと世の中におののいた。そして、家事がまるでできないという現実が突き付けられた暁には、俺は果たしてこの国に必要な人材だろうか、そんなことまで考えた。教科書と参考書で散らかった部屋の隅は、弁当の空箱が八割方を占めるゴミ袋が陣取っている。これだって先週のゴミの日に出しそびれたものだ。可哀相な洗濯物が更に追い討ちをかける。申し訳ない気持ちに苛まれながら、湿った服をはたいた。

幸い濡れてはいなかった洗濯物を両手に抱えながら、部屋に戻るべく踵を返そうとしていると、ベランダからの見慣れた風景に、やけに見覚えのある傘が映り込んでいた。

西春だ。考える間もなく思い当たる人物が一人。

覚えがあると言うよりは、あれは俺が奴にプレゼントした傘なのだ。西春の誕生日に、半ば嫌がらせでくれてやった派手なヒョウ柄の傘。まさか律儀に使っているとは夢にも思わなかったが、あいつ以外にあんな趣味の悪い柄の傘を日常的に使う人間がこんな入り組んだ住宅街を歩いているとも思えない。

俺の家に向かってるんだろうなあと、直感的にそう思う。

そして見事的中したそれは、数分後俺の家のチャイムを鳴らした。

「...西春」

「久しぶり、卯月。元気？」

「.....その傘使ってるんだ」

「ん？ これ結構女子受けいいんだよね」

あそお、と適当に返して部屋に上げる。それってつまりからかわれてるか馬鹿にされてるかどっちかじゃねえの、と心の中で毒づいておく。1年半ぶりに見た西春は、髪の色が少し薄くなっていることと、服装が制服じゃないことを除けば、高校生の頃と何ら変わっていなかった。

「？」がつくときに語尾が上がらない癖も、女のことを第一に考えているところも。時間が止まったかのような西春の容姿や態度に、自分の感覚まで遡りそうでたじろぐ。こいつどうやって生活してるんだ。本当に同級生か？

「で、何か用だろ？ わざわざ日曜日に」

「あれ。卯月先約でもある？ 彼女来るの？」

「別にねえけど...彼女も今いない」

何とはなしに告げると、西春は「よかったー」と胸を撫で下ろす仕草を見せた。

「なにが？」

「いや俺さ、卯月に慰めてもらいにきたんだよね」

「は？」

振られちったの。彼女に。あ、もう元カノなんだっけ？だから1人でいるの寂しいじゃん。卯月の住所は年賀状で調べただけ。

軽い口調で話しながら涙目になっている。なんで泣く。お前今まで何人の女に振られてきたんだよ。俺が知るだけでもかなりいるぞ。その度に泣いてきたのかよ。ばかかよ。ベランダから発見したとき既に、寂しそうなオーラを漂わせていたのには勘付いていたが、その捨てられた子犬のような目こそ高校生の頃と全く同じだった。悲しそうに笑う表情が1番上手いと、ずっと思っていた。そんなこと言えたわけではないけど。

「なにがいけないんだろうなあ。あんた何か重いつてさ、もっと具体的に教えてよ！って聞こうかと思っちゃった」

「突然やってきて唐突に元カノの話切り出すところとか、じゃね？」

「.....そこか！」

西春が素直に目を見開く。

瞼についていた雫が飛んで、涙目はどこかへ行った。どこまでも健気で、不憫な奴だと思う。

西春のそういうところを、重たいと受け取る女もいるんだろう。最初はひたすら馬鹿正直な西春を可愛いとでも思って惚れたんだろうに。同じところが今度はマイナスに転じて別れて行くってんだから、女も分からないな。

そう言うと、西春は深く頷いて賛同してくれた。

「俺の理解者は卯月だけだよ...卯月好きー」

「おう。俺も好きだよ」

「だろー？ もっと俺に愛情を！」

「俺は西春がずっと好きだからさ、また頑張って彼女探しな」

まァこの世の中で俺以上にこいつのことを大事に思ってる奴なんていないだろうけど、それでも世の中は広いから。きっと西春の全部を好きって言って求めてくれる人だって現れるよ。

だからさ、たかだか女に振られたくらいで、一々泣いたりするな。

「また振られたら俺がいくらでも慰めてやるよ」

「うん。お願いします」

俺がくしゃくしゃと西春の茶髪を撫でると、よっしゃ俺頑張る！と意気込んで、俺最近料理してるんだよね、と突然話題変換を始めた。だから卯月に振る舞ってやるよ、と。

「えー...お前って器用だったっけ」

「年上の人と付き合ってたときに覚えたの。その人が家事なんもできなくて」

それで西春が自分の生活を返上して家事を一から十までこなしてたらしい。

どんな愛情表現だ。重たくて腰が曲がりそうだ。

「お前ん家材料なんもねえのなー」

冷蔵庫を開いた西春が、あからさまに落胆した。

水かビールを飲むときしか開けない冷蔵庫の中身なんて、俺すら把握していない。

「料理とかしないからな。器具もそんなにねえぞ」

「米は？」

「あー、あるかも」

何も無いときは炒飯がいいよ、と西春が胸を張る。俺は炒飯といえば、中華の職人が炎を上げる中華鍋を振り回している姿しか浮かばないが、西春は俺の家の浅いフライパンで10分もせずに作ってしまった。米と、卵と、葱とハムで。

台所に立つ西春の姿は、思ったより絵になっていた。

こいつが女に振られるのは、西春がどこの彼女よりも彼女らしいからじゃないか、なんて。

「誰かが作った飯、久しぶりに食った」

「不健康だな、卯月。お前も早く彼女作ればいいのに」

「そうだなー」

そんなことを言いながら、彼女を作ろうなんてここ何年か考えたこともなかった。西春がいたからかもしれない。もちろん西春は俺の恋人なんてわけじゃなく、俺としてもそんなむさ苦しいものは御免被るが、女好きなこの男がことあるごとに俺の元に帰ってくるだけで満たされていた。それ以上を望もうなんて、思ったことさえなかったことに気付く。

「卯月さーあ」

「うん？」

「俺のこと大好きだよなあ」

米を噴き出しかけた。なんだそれ。いや好きだけど。好きだけどさあ。

「それでなんで、彼女作れとか言うの？」

「.....ええ？」

西春はいたって真面目で、なんで海は青いの？と訊ねる小学生のような素朴さだ。

だって俺がいくらお前を好きだったところで、俺はお前の彼氏にも彼女にもなってやれないんだからさ。俺はお前を大事だと思ってるけど、守ってやりたいなんてこれっぽっちも思わない。こんな風にざらっと飯なんか作っちゃって、余計にそんなおこがましいこと思えるかよ。それに俺もお前もまだ若いんだし、俺としても今からお前に身も心も捧げる心意気ってのは中々侘びしいものがあるからな。いつかお前が遂に女に飽きるような年になったときに、身も心も捧げてやるのは、まあやぶさかじゃないけれど。

とかなんとか格好良い台詞は、全て飲み込む。

「彼女に振られたときのお前を慰めたいから、だな」

「.....趣味最悪」

茶化したら睨まれた。俺は今傷心中なんだぞ、と喚いている。知った事か。これからも存分に傷付いて、我が家に足しげく通いつめることだな。そしてまた手料理を振る舞ってくれ。米と卵と葱とハムは、また買い足しとくからさ。

「なあ今思い出したんだけど」

丁寧に台所で食器まで洗ってくれている西春が、唐突にこっちを向いた。

「俺とお前って、キスしたことあったよな」

「...あー、あったな」

記憶を巡らせる。確か学園祭の打ち上げで、日頃一緒にいる俺と西春をからかい始めた女子達が促したのだ。俗に言う、キスコール。酒はなかったが、空気にも酔える年頃だ。恐ろしい過去の1つや2つ、持っていて不思議ではない。

「もっかい、やってみる？」

恐ろしいことを言い出したのは西春だった。

「...さすが愛に飢えた人間は言うことが違うな」

「.....そう、俺今飢えてるからさあ」

女子達を喜ばせるためにするキスするのも大概おかしなものだけど、誰も見てないところでキスもいよいよ危ないな、と思いながら。

皿を洗って両手を泡だらけにしている西春の顔だけをこちらに向けて、唇が触れるだけのキスをした。

「ムードもへったくれもねえな」

唇を離れた途端、笑い飛ばされた。西春はゲラゲラ笑いながら、何事もなかったかのように食器を洗っている。

「当たり前だろ。どこまで酔狂なことして遊んでんだ、俺達...」

「でも卯月が好きとか言うから、なんかちょっと絆されかけたわ」

「脅しか？ それ。ここに居座ろうってか？」

「誰が住むか。こんな不便なところ」

それもそうだ。俺としては、食費が浮いていいんだけど。

でも西春はこんなところに匿っていい奴じゃない。やっぱり何だかんだ言っても、こいつは女の隣にいるのが1番しっくりくると思う。西春の好きな、長い髪やでかい胸を持ち合わせていない俺にできるのは、せいぜい高見の見物くらいだ。そしてまた、しょぼく来てここにやってくる西春をベランダから見つけてやるよ。さっきみたいに愛に飢えてんなら、キスくらいくれてやったっていい。あんまり言わないけどさ、俺は結構お前に尽くす気満々なんだぜ。

言ったら、西春はまた笑い出した。

「お前、そりゃ重いよ」

って。振られたときに言われたらしい台詞を、狙い澄ましたかのように。

お互い様か。丁度良いな。空っぽの冷蔵庫に凭れ掛かって、俺も笑う。

いつの間にか雨の止んだ空には雲間から太陽の光が漏れて、台所の窓から差し込むそれが、洗ったばかりの食器にキラキラと反射していた。
